玉渕あや子がこれ以上ない大きな声で、山のむこうに届けと願って、さけんだ。
「たーーーまやーーーーー！！！」
「まだ時間じゃないが」
草垣誠治の冷静なひとことに、わかってるよ、という言葉とともにべっと舌が出される。
すぐにやまびこがこだました。玉渕が右耳に手を添えてそれを聞いた。そして満足そうに笑う。草垣が無遠慮に言う。
「大学生にもなるのに何も変わらないな」
呆れを通り越して関心が在った。そして純然な楽しさも。ふたりは高校生まで同じ土地で、そして同じ学校で仲良い幼馴染として過ごしていた。大学で初めて距離を置き、そして夏休みに入った今。今日が久しぶりの再開だった。久しぶりとは言えども五ヶ月に満たない程度だが。
「……まだ五ヶ月ぐらいしかたってないじゃん」
「高校生の頃からこども過ぎだよ。頭は良いのに」
玉渕は都内の有名私立大学に、草垣は県内有数の国立大学に進学していた。
「むずかしくあれこれ考えるほうが大変だから、こうしてるんだよ、わたしは」
草垣はその返答に意外性を感じた。五ヶ月前の彼女であれば鼻を鳴らして首肯していた。
その意外性は、会えなかった月日が何かしらの影響を与えたのだと、彼に確信させた。こうして人は変わっていくのかも知れない、と独り静かに寂しく学ぶ。
四度のまばたき分の間は鈴虫の音がなんとか取り次いだ。玉渕が何も言わずに黙っていようとしてられる時間はそれだけだった。鈴虫の鮮やかな音色が無ければ二度目のまばたきだって待たなかっただろう。玉渕が何か言おうと口を開きかけたところで、草垣は彫刻したような嘲笑を以って、ゆっくりとこう言った。
「……そうだったのか、じゃあ、高校の卒業式翌朝に俺を呼び出してお手製の横断幕を張らせたのも、そういうわけなのか」
「あっ、あれは」
「『あれは』？」
「あれは……きっと誠治となら楽しいだろうと思って……」
きっとどこかが欠落した回答。しかし草垣にはそれで十分だった。欠落した部分を補おうとは思わなかった。
「それは今日急に誘ってきたのもか？」
「……うん、そうだね」
「そうか、それは嬉しいな」
玉渕はその返答に意外性を感じた。五ヶ月前の彼であれば無言を貫いていた。
その意外性は、会えなかった月日が何かしらの影響を与えたのだと、彼女に確信させた。こうして人は変わっていくのかも知れない、と独り静かに嬉しく思う。